

明治のルイス・キャロル②  
永代静雄と「トランプ国の女王」

川戸道昭

日本におけるルイス・キャロルの紹介は、最初に『鏡の国のアリス』が紹介され、次いで『不思議の国のアリス』が紹介されるというように原作とは異なる順序で発表された。前回第一回目の本欄では、『鏡の国のアリス』の本邦初訳を取り上げたので、今回は『不思議の国のアリス』の初訳について紹介する。それが掲載されたのは、明治四一年二月創刊の『少女の友』（実業之日本社）という雑誌で、その一号に「黄金の鍵」が、二号に「トランプ国の女王」（同三月）、三号に「海の学校」（同四月）が、それぞれ掲載されている。題名からも推察されるように、原作に忠実な翻訳というよりは、作中の興味深い話しをところどころ抜粋して、各号読み切りの物語に仕立てた翻案作品である。作者は「須磨子」とのみ署名されているが、じつは、その紹介者は田山花袋の『蒲団』のモデルとなつたといわれる永代静雄（一八八六—一九四四）であった。第一号が発表された明治四一年二月というのは、『蒲団』の発表からわずか五ヶ月後のことで、世間の関心は専ら花袋自身の私生活、とくにその美貌のまな弟子・岡田美智代との関係に注がれていた。そんな衆目環視のなかで、美智代の恋人であり後に彼女の夫ともなる永代静雄が匿名でつづつた『不思議の国のアリス』の紹介とは一体どんな種類の紹介であったのか。それが生まれた背景にも大変興味をもたれるので、永代静雄という人物の経歴や文筆家としての才能にも焦点を当てながら内容の点検を試みることにする。

ルイス・キャロルの作品といえば、すぐに思い浮かぶのは作中随所にみられる言語的遊戯である。たとえば、『鏡の国のアリス』を例にとると、第六章に登場するハンプティ・ダンプティが口にする、「二つの意味が一つの語の中に詰め込まれている」、いわゆる「かばん語」である。前回にも紹介したとおり「鏡世界」の翻訳者・長谷川天溪はそうした言葉のあそびにはまったく歯が立たず、単にそれを無視するというかたちですませてしまった。それに対して永代のほうはどうか。そうした言語の多義性や言葉あそびにも多少なりとも注意を払う姿勢を示しているのか。

第一作目の「黄金の鍵」をみるかぎり、訳者は、どうもそうした方面にはあまり関心を向けていないように思われる。物語は、主人公のアリスが一匹の兎の後を追いかけて、穴の中へと入ってゆき、テーブルの上に置いてあった菓を飲んで体が小さくなったり大きくなったり、涙の池に落ちたり、と原作どおりに進んで行くが、訳者の関心はどちらかというと原作の筋を追うことのほうにあって、主人公が心中に展開させる自問やさまざまな連想にはあまり注意が払われていない。これもまた天溪の「鏡世界」同様、単なるあらすじの紹介にすぎないのかと思っていると、第二回の「トランプ国の女王」になって雰囲気は一変する。そこに登場する最も個性豊かなトランプ国の女王とアリスの間で、相互に発する言葉の意味がかみ合わない次のようなエクセントリックな会話が紹介されるのである。

《[女王は]『これ娘、お前の名は何と云ふ。』／と訊ねました。アリスは丁寧に、／『私はアリスと申します。』と答へましたが、心の中では『何と云ふ威張り方だらう。皆なカルタの癖に。私は些とも恐ろしいわ。』と思ひました。／女王は、其処に倒れてある三人の者を見て、／『これは誰だい。』／とアリスに訊ねました。立ってみれば解るので

すが、こんなに俯伏に臥てゐれば、カルタの裏は皆同じですから、誰が臥てゐるのか知れないのです。／『どうして私がそれを知るものですか。』とアリスは答へました。そして又、『その人たちと私とは何の関係も無いぢやありませんか。』と申しました。／女王は、はったとアリスを睨みつけて身体を震はしながら、暫らくは野獣の様にブウブウ呻ってゐましたが、急に大きな声で、／『首を斬れ！この娘の首を斬れ！』と叫びました。』

「トランプ国の女王」は、(上)(下)二章からなる(上)篇に原作第八章の「女王のクローケ場」のストーリーが、(下)篇に第十二章の「アリスの証言」のストーリーが収められているもので、原作の二章分をわずか八頁のスペースにまとめたものだから、さぞかし粗っぽい紹介だろうと思っていると、意外にも、ここに登場する女王のように、ふた言目には「首を斬れ！」を繰り返す女王の常軌を逸した言動など、原作の内容を比較的忠実に反映する箇所も見られ、これはこれで充分楽しめる『不思議の国のアリス』の紹介となっている。物語は(下)篇に至って、裁判の場面が変わるが、原作の九章から十一章までが省かれた関係から罪人となるはずのハートのジャックが出てこない。そこで永代は、急遽、アリスを罪人に仕立て法廷に立たせるという離れ業をやつてのける。その罪状はアリスの体が次第に大きくなって来たというもので、それをめぐる王様とアリスの間答がまた大変ふるっている。

《「王様は……急に何か手帳に書いて、そして『静まれ！』と、一同へ申し渡して。／『勅令、第五十二条。一哩より高き者は、何者にても此の宮を去るべし』と読みました。／皆、一時に、アリスの方を見ました。／『私は、一哩なんて、そんなに高くは無い。』とアリスが申しますと、王様は、／『いや、一哩以上だ。』／と云ふ。王様の言葉に次いで女王が、／『否々、二哩以上です。』／と申しました。／『何でも好いわ、私は何処へも行かないから、それに、その規則は正しく有りません。たった今、書いたばかりぢやありませんか。』／と、アリスが申しますと、王様は、あわてゝ／『いや、これは此の手帳の中で、一等古くからある規則ぢや。』／『一等古くから有る規則ならば、第一条で無ければなりません。貴君は今、第五十二条と云つたでせう。』／と云つたアリスの言葉を聞いて、王様は真蒼になりました。／今まで黙って二人の間答を聞いてゐた女王は、この時顔を真赤にして、かみつく様な声で、／……『アリスの首を斬れ！』》

これは実に緩急自在な翻案作品である。原作のストーリーを大きく作り替えてしまった箇所があるかと思えば、上に引用したアリスと女王の会話や王様とのやり取りのように、原文を細部まである程度忠実に再現している箇所もある。これを前に掲げた天溪の「鏡世界」と比較してみるとその違いがよく分かるだろう。「鏡世界」の方はただ原作の筋を大掴みになぞっているだけで、細部にまで関心を及ぼしている箇所はほとんど見あたらない。ところがこの「トランプ国の女王」の方は、話の筋に関しては「鏡世界」同様、原作の筋をごく大ざっぱに紹介するだけで原文を無視した箇所も少なくないが、その一方で、物語のところどころに原作をある程度忠実に再現した会話をはめ込むことによって、原作にみながるナンセンスな雰囲気を出すのに一定の効果をおいている。しかも、文章がいたって平易・明快な文章ときているので、面白さの本質は当時の少年少女にも十分理解可能なものであったと思われる。この永代の翻案作品は、日本における児童文学の先駆けというばかりか、日本におけるナンセンス文学の先駆けとしても永く記憶にとどめなければならない作品ということになるだろう。

永代はこのあとさらに「海の学校」と題して、原作の九章「ニセ海ガメの話」と十章の「えびのダンス」の一部を紹介している。内容は「トランプ国の女王」同様、原作の大筋をなぞりながら、そこに出てくる会話を再現するというやり方で、それなりの面白さは伝

わってくるが、しかしその一方で限界もみられる。翻訳に際して一番の障害になったと思われるのは、やはり例の同音異義語や二重義語、擬音語などを駆使した言葉の遊戯である。たとえば、そこに出てくる「ニセ海ガメ」がいうには、彼が学校で習った授業は、初日は十時間で、次が九時間とだんだん減ってくる。アリスが「奇妙な時間割ね」というと、彼はすかさず「だから授業というんだよ」と答える。これは英語の「授業」に当たる lesson が「減ずる」を意味する lessen と同音異義語で、それをかけた言葉の遊びと知ってはじめて面白さが理解できるというものである。現在の英語・日本語に通じた翻訳者ならば、「授業」と「減ずる」に相当する適当な日本語を見つけて日本語版の洒落に置き替えていくところだろうが、永代は、単にニセ海ガメの「だから授業というんだよ」の押さえの一言を省くという形で対処した。それがために会話の妙味はまったく失われる結果に終わってしまっている。

これはまだしも単純な例で、キャロルの作品にはその外にも日本語に訳しがたい表現が数限りなく登場する。たとえば、同じ第九章で、アリスがニセ海ガメに学校の課外授業で「フランス語と音楽」を習ったという、ニセ海ガメはすかさず「洗濯は？」と聞き返す。われわれはなんでこんなところに「洗濯」が出てくるのかとびっくりするが、それは、当時の寄宿学校の領収書にきまって「French, music and washing--extra」と書かれていたことを受けた言葉遊びなのだ。つまり、フランス語と音楽と日々の洗濯には「特別料金(extra)」が請求されるという請求書の意味を、そこにある「特別料金」の extra と「課外授業」の extra をかけて洒落に仕組んだというわけである。これなどはうっかりすると現在の翻訳者だって、意味を掴みそこねる恐れのあるもので、英・米に広く出回っている「注釈版・ルイス・キャロル」に頼らずには正確な翻訳もままならないということになる。永代はこの言葉遊びにもまったく歯が立たなかったとみえ、「洗濯」を「水練およぎかた」にかえて、「貴方達は水の底に居るんだから、水練およぎかたなんて習はんでも好いでせうに」と、違った種類の笑いに変えている。

西洋の文学作品、とくにキャロルのそれのように使用されている言語そのものに興味の大半が依存している文学作品を日本語に移し替えることの難しさや空しさは、現代の翻訳者であればだれもが痛感しているはずのものだが、そこは明治人の特色だろう。永代はそんなことには一切構わずに、さらなる創作活動に意欲を燃やしていった。そして、なんと『不思議の国のアリス』の続編を思いつくに至るのである。彼は同じ『少女の友』に、キャロルの作品とはまったく別種の「アリス物語」を連載する。それは「海の学校」が終わった直後の四十一年五月にはじまって、翌年の三月にいたるまで、延々十一月にもおよぶ長期の連載であった。その内容をみるに、「真珠国」を訪れたアリスが、そこに囚われていた「大悪龍王」の甘言にのって彼を逃がしてやったことから、自分自身がカモメに変えられてしまうといった話で、おおよそ原作とは似て非なる凡庸な物語である。やはり永代にも、キャロルの作品の本質が奈辺にあるかが分かっていたいなかったということになる。

永代が『不思議の国のアリス』をどのように理解していたかについては、『少女の友』に連載された「アリス物語」が一篇の書物にまとめられ、一九一二年（大正元）年に東京の紅葉堂書店から発行された際に、「はしがき」の中にその内容が示されている。それによると、彼はアリスという少女をこんなふう理解していた。

《アリスは空想の子である。理屈を離れて空想の世界を飛行したところに、アリスン面目が躍おどつてゐる。一体我々は何かの空想無くして生き得る者ではない。事実を歴史の父とすれば、空想はその歴史を生む母である。空想に親しむことは、やがて新しい歴史を築く手段だとも云へよう。私は諸君に空想の力を説きたい。／正しく、美しい空想——そこにアリスの無邪気と、同情と、快活と、熱心と、そして正義を求める心とが育

くまれた。私はこの物語の多くの愛読者たちに、アリスを学んで、さうした空想的気分を養はれるやうにお勧めしたいと思ふ。<sup>(32)</sup>

要するに、永代にとっての『不思議の国のアリス』とは、主人公の〈正しく、美しい空想〉が創りだした冒険物語であった。それが、この物語に対する彼の理解の本質であったことは、第四回以降の「アリス物語」の内容をみればすぐに解る。真珠国に囚われていた〈大悪龍王〉の甘言にのってうっかり彼を逃がしてしまったアリスは、龍王の手でカモメに変えられてしまう。しかし、幾多の艱難辛苦を経た後に、「真珠老王」に助けられ、最終的にはその後継者の「月麿」の結婚相手となって、めでたく物語の幕を迎えるという話の内容は、おおよそナンセンスな笑いなどとは無縁のものである。日本のSF・怪奇小説の歴史に詳しい横田順彌氏は、永代静雄を「SF作家」と受けとめているが（「明治時代は謎だらけ！／SF作家としての永代静雄（2）」『日本古書通信』第六一巻八号）、永代の文学に対する興味の中心が「空想」が生みだすさまざまな冒険奇談にあったことは、この『アリス物語』をみても間違いないところである。

それはそうと、永代は一体この『不思議の国のアリス』の原書をどこで手に入れたのだろうか。それについては、さきほどの「はしがき」の中にこうある。

《アリスの本家は英国である。私は曾て早稲田大学の教授内ヶ崎愛天先生から、キャロルといふ人の書いた『アリスの奇界探検』といふ本を拝借して読んで、非常に面白く感じた。それで、その中の特に面白さうなところを、三四回に訳して、その頃創刊の『少女の友』の初号から続けて寄稿した。それが幸いに読者の歓迎を受けたので、以下引続いて、私の中にみたアリス嬢を活動させることになった。謂はゞ日英同盟合体のアリスなのである。》

永代は、明治三九（一九〇六）年四月、二〇歳で早稲田大学の「高等予科文科」に入学するが、同年七月には体調を崩し、一〇月には同大学を除籍になっている（群馬県館林市の田山花袋記念館が平成三年一月に開催した「永代静雄展」で配布されたパンフレットの「永代静雄年譜」による）。したがって、ここにあるように同大学の教授であった内ヶ崎愛天（作三郎）から『不思議の国のアリス』の原書を借りて読んだのは、おそらく彼が早稲田に在学した六ヶ月間のことであったと想像される。それは、ちょうど、彼と岡田美知代のことが花袋の『蒲団』に取り上げられる一年前のことであった。岡田とはその前年に京都において親密な仲になり、彼は当時在籍していた同志社をやめて彼女を追って上京、その後『蒲団』に記されているような事態へと発展していく。そのような多事多端のなかで原書を借り受け、そして翻訳されたのが、彼の「黄金の鍵」や「トランプ王国の女王」の翻訳であったというわけだ。

日本における『不思議の国のアリス』紹介の第一号が、そうした文学史上に名高い事件

の渦中にあった人物によってなされたということ自体大変興味深いことだと思うが、われわれがここで注目すべきことはそれ以外にもう一つある。すなわち、ルイス・キャロルの紹介と早稲田大学出身者の関係である。前回紹介した「鏡世界」の翻訳者長谷川天溪も早稲田大学の前身の東京専門学校出身であったし、次回取り上げる予定の日本で最初に『不思議の国のアリス』の全訳『愛ちゃんの夢物語』（内外出版協会、明治四二年二月）を世に送った丸山英観も早稲田大学「英文学科」の卒業生（明治四一年）であった。つまり、日本で最初のアリスの冒険譚の紹介は、三篇ともに早稲田大学の関係者によってなされた紹介であったということになる。とくに、『不思議の国のアリス』を紹介した永代と丸山は、早稲田在学の時期も重なっているところから、その背景には内ヶ崎作三郎の存在があったと考えられる。その内ヶ崎の存在も含めて、今日世界で最も愛読されているアリス物語を日本に移植する上で、早稲田大学関係者が果たした役割に、われわれはこれまで以上に大きな関心を寄せてみなければならないだろう。

最後に、永代のその後の経歴を、先ほどの「略年譜」によって簡単に記しておく。永代は明治四二年一月、田山家の養女となった美知代と結婚。同年一月に離婚するが、再び同居をはじめ、大正六年に美知代を入籍。彼女との間に一男一女をもうける。その後、二人はともに別の相手と再婚し、それぞれの人生を歩む。永代の、主な職歴としては、富山や福岡で記者をした後に、東京毎夕新聞に入社、編集局長等を歴任する。大正八年に同社を退社し、新聞研究所を開設、昭和一五年に同研究所が廃止されるまでその発展に貢献する。昭和八年頃から自宅で伝書鳩を飼いはじめ、伝書鳩の飼育普及に努める一方で、さまざまな大会に参加し、常にトップクラスの成績を収めた。昭和一九年、腸チフスのために死去。

主な著・訳書としては、『新島襄言行録』（明治四二年）を初め、『都会病』（ルネ・バザン著、永代訳、大正三年）、『画家の妻』（ドーデ著、永代訳、大正三年）等、私の把握しているものだけでも一〇点近く存在する。